第63回 地域医療再生への道

第2回日本地域医療学会学術集会に参加

城西大学経営学部教授　伊関友伸

地域総合診療専門医の在り方と展望を議論

2023年12月15日から17日まで三重県志摩市で開催された第2回日本地域医療学会学術集会に参加した。日本地域医療学会は、全国国民健康保険診療施設協議会(国診協)、全国自治体病院協議会(全自病協)、地域包括ケア病棟協会、日本公的病院精神科協会、日本慢性期医療協会、全国厚生農業協同組合連合会の医療関係6団体により設立された団体で、会長は小野剛全国国民健康保険診療施設協議会会長が就任している。

高齢化が進む日本では患者が抱える複合的な疾病を総合的に診て、地域全体で治し・支え・寄り添う医療が求められている。このような医療実現の担い手として「地域包括ケア」を実践できる総合診療専門医に大きな期待が寄せられている。日本地域医療学会は、「病気を診る」だけでなく「地域を診る」眼を持つ総合診療医を養成することを目的に、総合診療領域のサブスペシャルティ専門医としてこれまでの国診協・全自病協の「地域包括医療・ケア認定医」を発展させた「地域総合診療専門医」制度を立ち上げ、育成に取り組んでいる。

第2回学術集会は、「地域医療から日本を再興する～答えのない新たな冒険へ～」をメインテーマとして、地域総合診療専門医の在りたい姿を探るとともに、これからの展望について議論を深めることを目指して開催された。

突然の学会長の交代

学術集会は、当初予定されていた学会長が諸般の事情から辞任をし、学会1カ月前に志摩市民病院副院長の日下伸明医師が学会長代行に就任する事態となった。SNSに日下学会長代行から学会を盛り上げるための「HELP!」の書き込みがあった。筆者は「HELP!」の文字を見た瞬間に学会支援のために参加することを決意した。プログラムを確認すると、空いたコマ・会場があり、空いた

コマに手弁当で講演をすることを日下学会長代行と学会事務局に提案した。その結果、16日の11時40分から「【日下学会長代行支援緊急講演】これからの日本の地域医療に起きること」というテーマで講演を行うこととなった。

さらに、日下学会長代行の提案で、年末の忙しい時期に三重県まで出向いて学会に参加できない人向けに「へき地医療座談セッション」としてオンラインレクチャーが設定された。「へき地医療×○○」をテーマとして、ゲストスピーカーと参加者でつくる交流型セッションは、医療の各分野で先端を走るスピーカーが「尖った」話をするセッションとなった。筆者も日下学会長代行の依頼で、15日の15時から熊本県の球磨郡公立多良木病院副院長の稲田啓介医師と一緒に「伊関教授に聞く『自治体病院のきほんのき』」というセッションで議論をした。

139人の医療系学生や高校生が集会に参加

日本地域医療学会学術集会の特徴として、明日の日本の地域医療を担う医療系学生や高校生が全国から集まったことがある。今回は139人の医療系学生や高校生（医学生127人、高校生12人）が学術集会に参加した。16日の午後にはシンポジウムV（学生企画）として、「ライフイベント×医師キャリアシンポジウム」として、医療系学生が現在地域の医療現場で活躍する医療従事者に質問をするセッションが行われた。最終日の17日には「高校生による地域医療体験学習とは」の講演とシンポジウム「高校生による体験学習プレゼン大会」が行われている。

16日の午後には「地域医療サミット」として、「みんなで話そう！～地域医療でまちづくり～」をテーマに住民参加型ワークショップが行われた。100名近くの参加者が一堂に会して議論を行った。筆者もファシリテーターとして会話のコーディネートを行った。議論には志摩市内の海女さん、若手医師、老人ホーム運営者、薬学生、三重県内の高校生と教員、医療ジャーナリストの方々が参加し、三重の地域医療に関して自由な意見を交わした。

両日、夜には懇親会が行われ、特に16日の懇親会は昭和の時代のような大広間で宴会形式で行われた（20歳未満の学生は禁酒を徹底）。学会講演や懇親会において何人もの医学生と意見を交換した。学生の皆さんの地域医療に関する熱い思いを聞き、日本の医療も捨てたものではないなと強く感じた。最後は、参加者全員で宴会場をぐるっと囲み、伊勢えびばやしの軽快なリズムで踊る「じゃこっぺ踊り」を全員で踊り、盛り上がった。

大成功となった学術集会

心配された参加者数も目標500人に対して514人の参加を得た。日下学会長代行からも、「今回の学術集会の目標であった『将来の地域医療に従事する学生・若手医師に地域医療への希望を持ってもらう』という点では、多くの学生・若手医師から地域医療に従事してみたいという声を頂いた」「これからの日本の地域医療に燈を灯すことができたのではないか」という言葉を頂いている。学術集会としては大成功であったと考える。最後に本学術集会の運営に関わった全ての方のご尽力に感謝をしたい。

なお、第3回の学術集会は2024年11月30日、12月1日に富山国際会議場で清水幸裕南砺市民病院院長を学会長として開催予定である。

タイトルの〝アスクレピオスの杖〟とは、ギリシア神話に登場する名医アスクレピオスの持っていた蛇（クスシヘビ）の巻きついた杖。医療・医術の象徴として世界的に広く用いられているシンボルマークである。

筆者プロフィール

伊関友伸（いせき　ともとし）

1987年埼玉県入庁、県民総務課、大利根町企画財政課長、県立病院課、社会福祉課、精神保健総合センターなどを経て、2004年城西大学経営学部准教授、2011年4月同教授。研究分野は行政学。総務省「持続可能な地域医療提供体制を確保するための公立病院経営強化に関する検討会」構成員など、数多くの国・地方自治体の委員を務める。著書に『人口減少・地域消滅時代の自治体病院経営改革』（ぎょうせい2019年）、『新型コロナから再生する自治体病院』（ぎょうせい2021年）など。